

II. 地域診断指標に関する研究

個人および地域レベルにおける要介護リスク指標と ソーシャルキャピタル指標の関連の違い—JAGES2010 横断研究—

井手 一茂 (イデ カズシゲ)

宮國 康弘 (ミヤグニ ヤスヒロ)

中村 恒穂 (ナカムラ ツネオ)

近藤 克則 (コンドウ カツノリ)

厚生指標 第 65 巻第 4 号 2018 年 4 月

目的 地域づくりによる介護予防を推進する上で地域診断が重要とされ、ソーシャルキャピタル (Social Capital, 以下, SC) が注目されている。地域診断指標の課題に生態学的錯誤 (地域レベルの変数間の関連から個人レベルの関連を誤って推論)、個人主義的錯誤 (個人レベルの変数間の関連から地域レベルの関連を誤って推論) が挙げられる。地域診断に用いる SC 指標にはこの両者がないことが望ましい。本研究の目的は、個人・地域の両レベルにおいて 2 つの錯誤がない要介護リスクと関連を示す SC 指標を抽出することを目的とした。

方法 本研究は、日本老年学的評価研究 (JAGES) 2010 に参加した 25 保険者 31 市町村の要介護認定を受けていない 65 歳以上の高齢者 98,744 名を分析対象とした。個人レベルのロジスティック回帰分析 (有意水準 5%) の目的変数には、基本チェックリストの要介護リスク指標である生活機能低下、フレイル、運動機能低下、低栄養、口腔機能低下、閉じこもり、認知機能低下、うつ の 8 指標を使用した。説明変数は、SC 指標 (社会的サポート、社会参加、社会的ネットワーク、Saito の SC 指標) の頻度別 35 指標 (280 モデル) とした。調整変数は、年齢、性別、教育歴、等価所得、疾病の有無、主観的健康感、婚姻状態、家族構成とした。地域レベルの分析単位は校区とし、Spearman の順位相関分析 (有意水準 5%) を実施した。変数は個人レベルと同様とし、年齢 (前期・後期高齢者) による層別化を実施し、1 校区あたり 30 名以上の前期 349 校区、後期 287 校区を分析対象とした。

結果 個人レベルでは SC 指標が高いほど要介護リスク全 8 指標が有意に低い保護的な関連が 28/35 指標 (80.0%) でみられた。しかし、地域レベルでは SC 指標が高いほど要介護リスクが高い非保護的な関連が 20/35 指標 (57.1%) で 1 つ以上みられた。生態学・個人主義的錯誤がなく、要介護リスクに保護的な SC 指標は、社会的サポート、社会参加のうち、ボランティア (週 1 回, 月 1~2 回)、スポーツ・趣味 (週 1 回, 月 1~2 回, 年数回)、就労ありと Saito の SC 指標 (社会参加, 連帯感) の 15/35 指標 (42.9%) に留まった。

結論 生態学・個人主義的錯誤は 20/35 指標 (57.1%) でみられ、2 つの錯誤がなく要介護リスク抑制を示唆する地域診断指標は、社会的サポートやボランティア・趣味・スポーツ・就労など一部 (42.9%) の SC 指標に留まった。

キーワード ソーシャルキャピタル, 介護予防, 地域づくり, 地域診断, 生態学的錯誤, 個人主義的錯誤